

資料

親子関係の年代的推移²

——25年前と現在の親子関係についての正準判別構造と平均・標準偏差の比較——

小 高 恵¹

A TRANSITION OF TIME IN PARENTS-CHILD RELATIONSHIPS

—— A comparison of canonical discriminant structures, means and standard deviations of parents-child relationship scales between the present and 25 years ago ——

Megumi KOTAKA

In order to examine the transition of time in parents-child relationships, the data of the Children's Report of Parental Behavior Inventory were collected 25 years ago by KOJIMA, and the same scales' data collected in 1990 by the author were compared by means of a canonical discriminant analysis. 2 pairs of canonical factors were similarly significant in both data, though factor structures were a little different. Means of canonical variables of four groups (son-father, son-mother, daughter-father, daughter-mother) also showed a little difference but the total patterns were similar on the canonical axes. The differences of means and standard deviations were tested. From these results, the role of parents of 25 years ago seemed to be clearer than nowadays. Present parents' attitude on emotional control seemed to be stronger than in the past.

Key words : parents-child relationships, canonical discriminant analysis, Children's Report of Parental Behavior Inventory, emotional support, emotional control.

問 題

父親、母親は子どもにとって、どのように認知されているのであろうか。父親の役割、母親の役割は文化によって、あるいは時代によって、異なるように思われる。日本社会の中においては、一般に「厳父慈母」、厳しい父親と慈悲深い母親というイメージがあるように思われる。また、西欧においても、父親は権威の象徴として、母親は受容的なものとして受けとめられているように思われる。そして、このような父親の役割、

母親の役割は家族を考えるためには、非常に重要な問題と考えられる。過去の研究では、Parsons T. & Bales R.F. (1955) は家族機能に道具的機能と情緒的機能が存在することを提案し、主に父親は道具的機能の役目を果たし、母親は情緒的機能の役目を果たすことを指摘している。速水 (1984) は、父親が社会と家族ないしそのメンバーを結ぶ接点に立っており、社会構造と個人を仲介する父親の役割の中で、重要なのは社会化の役割であると述べている。小川 (1984) によれば、フロイトはエディプス期における父親の役割を重視しているが、彼は、母親の役割についても重要視しており、母親は“両性にとっての人生における最初にして最強の愛情対象 (first and strongest love-object)”であり、その関係は“その後のすべての愛情関係の原型 (prototype of

1 関西大学社会学研究科 (Faculty of sociology, Kansai University)

2 本論文の作成にあたり御指導を賜りました関西大学社会学部辻岡美延教授に深く感謝いたします。

all later love-relations)”であると述べている。このような父親の役割、母親の役割は、子どもの性質にも関係するように思われる。馬場(1984)は、男らしさや女らしさというような性同一性の確立過程では、父または母との同一化が重要な役割を果たすと考えており、両親の持つ男らしさや女らしさが重要な意味をもつと述べている。Harris, D.B. & Tseng, S.C.(1957), Du Valle, E.W.(1937)は愛情面において、積極的な態度が父親よりも母親について表現されていると報告している。また、Anderson, J.P.A. (1940)は、母親はより愛情的であると評価されていると報告しており、Droppleman, L.F. & Schaefer, E.S. (1963)は、母親は父親より愛情的であり、無視や軽視が少ないと評価されていると報告している。また、高橋(1968)の依存性の研究においては、青年期後期の女子は依存の対象として父親よりも、むしろ母親を選択し、大学生女子では父親との結合はそれほど強くはないと述べており、父親は情緒的に拒否されているわけではないが依存構造の中では道具的色彩の増した位置づけがなされていると推測している。このように、過去の研究においては、父親は厳しく、母親は受容的であるという研究が多く見られる。

ところで、測定論的な観点から、P次元空間のデータを低次元の空間上で視覚化し、各群の相対的位置関係や群の分離に寄与している変数を調べる有効な方法に正準判別分析がある(鷲尾・大橋(1991))。すなわち、正準判別分析はP個の観測特性で与えられる集団間の特徴の差異をq個の因子に変換・縮約して、集団間の明確な特徴を示す手法である(後藤(1975))。

本研究では、小嶋氏の好意によって提供された25年前のデータと1990年に筆者が収集した新データ(以後、これを小高のデータと呼ぶ)について、息子→父、息子→母、娘→父、娘→母の4群間の特徴を検討するために正準判別分析を用いて分析を行い、さらに、小嶋のデータと小高のデータの尺度間の平均値と標準偏差についての有意性の検定を行った。

方 法

被験者 被験者はFIG. 1-1-1, FIG. 1-1-2のように小嶋(1969)の資料と1990年に調査して得られた筆者の資料とを用いた。すなわち、「一人の息子とその両親」「一人の娘とその両親」という組み合わせになっている。その数は、小嶋の資料においては、金沢市の中学2年生を対象としており、息子の組が150組、娘の組153組で、彼らの父親の年齢は45.3歳、母親の年齢は40.5歳であった。一方、小高のデータにおいては、福井県下

と大阪府下の中学2, 3年生を対象としていた。息子の組が113組、娘の組が123組であった。

本論文では、この資料を小嶋のデータ、小高のデータの息子から父、息子から母、娘から父、娘から母の組み合わせによる正準判別分析を行い(【分析1】)、さらに両者の平均、標準偏差について時代比較を行うことにした(【分析2】)。最後に総合考察を行うことにする。



FIG. 1-1-1 小嶋の資料
(小嶋 1969, Kojima, H. 1975)

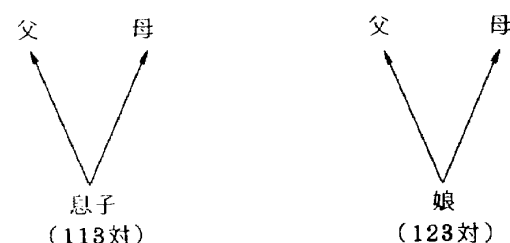


FIG. 1-1-2 小高の資料

尺度名 Schaefer の CR-PBI (The Children's Report of Parental Behavior Inventory) の18尺度192項目からなる質問紙で、そのうち、6尺度(AC, PI, AI, HD, RE, HC)は16項目、残り12尺度は8項目からなっている。各尺度とその尺度に含まれる質問項目は小嶋(1969)に公表されているので本論文においては各尺度名と尺度略号のみを掲載するに留める。

- 1 AC (ACCEPTANCE : 受容)
- 2 CH (CHILD-CENTEREDNESS : 子ども中心主義)
- 3 PO (POSSESSIVENESS : 所有欲)
- 4 RE (REJECTION : 拒否)
- 5 CO (CONTROL : 統制)
- 6 EN (ENFORCEMENT : 強制)
- 7 PI (POSITIVE INVOLVEMENT : 積極的関与)
- 8 IN (INTRUSIVENESS : 干渉的)
- 9 CG (CONTROL THROUGH GUILT : 罪悪感による統制)
- 10 HC (HOSTILE CONTROL : 敵対的統制)
- 11 IC (INCONSISTENT DISCIPLINE : 一貫しないしつけ)
- 12 NO (NONENFORCEMENT : 非強制)
- 13 AI (ACCEPTANCE OF INDIVIDUAL : 個性化の受

容)

- 14 LD (LAX DISCIPLINE: 甘いしつけ)
- 15 IP (INSTILLING PERSISTENT ANXIETY: 永続的な不安感情の押し付け)
- 16 HD (HOSTILE DETACHMENT: 非好意的離反)
- 17 WR (WITHDRAWAL OF RELATIONS: 関係の撤回)
- 18 EA (EXTREME AUTONOMY: 自由放任)

【分析 I】— 4 群の正準判別分析—

分析手続

上記の18変量に対する小嶋のデータの息子→父 (150 対), 娘→父 (153 対), 息子→母 (150 対), 娘→母 (153 対), と新しく得られた小高のデータの息子→父 (113 対), 娘→父 (123 対), 息子→母 (113 対), 娘→母 (123 対) の 4 群について, 別々に時代ごとに正準判別分析を行う。

結 果

1.1. 正準判別の結果

<小嶋のデータ>

固有値の値をみると $\rho_1=0.211$, $\rho_2=0.094$, $\rho_3=0.014$ となっており, 第 1 固有値と第 2 固有値が大きく, 第 1 正準変量と第 2 正準変量でほぼ 96% を説明していることがわかる。尚, 有意な正準変量は, 5% 水準で第 1 正準変量と第 2 正準変量であった。また, TABLE 1-1 の左側は小嶋のデータについての正準判別構造を示したものである。

<小高のデータ>

固有値の値をみると $\rho_1=0.156$, $\rho_2=0.106$, $\rho_3=0.039$ となっており, 第 1 固有値と第 2 固有値が大きく, 第 1 正準変量と第 2 正準変量でほぼ 87% を説明していることがわかる。尚, 有意な正準変量は, 5% 水準で第 1 正準変量と第 2 正準変量であった。また, TABLE 1-1 の右側は小高のデータについての正準判別構造を示したものである。

<小嶋のデータ>

1. 第 1 正準変量

第 1 正準変量と相関の高い変量は, 受容 (AC .403), 子ども中心主義 (CH .528), 所有欲 (PO .466), 統制 (CO .443), 干渉 (IN .601), 非強制 (NO -.431) があげられる。すなわち, この正準変量は親が子どもを愛するが故に子どもを自分のものにしておきたいという正準変量であるように思われる。

2. 第 2 正準変量

第 2 正準変量と相関の高い変量は拒否 (RE .472), 干

渉 (IN .417), 甘いしつけ (LD .428), 永続的不安感情のおしつけ (IP .426), 関係の撤回 (WR .414), 自由放任 (EA .446) である。すなわち, この正準変量は親の感情的な統制の側面と放任の側面を合わせもった親の養育態度を表わす正準変量であると思われる。

<小高のデータ>

1. 第 1 正準変量

第 1 正準変量と高い相関を示す変量は受容 (AC .435), 非意的離反 (HD -.565) であり, 親の養育態度の受容-拒否の次元を代表する正準変量と思われる。

2. 第 2 正準変量

第 2 正準変量と高い相関を示す変量は拒否 (RE .446), 統制 (CO .523), 強制 (EN .569), 干渉 (IN .701), 罪悪感による統制 (CG .434), 敵対的統制 (HC .451), 永続的不安感情の押し付け (IP .515), 関係の撤回 (WR .552) であり, この正準変量は親の感情的な統制を表わす正準変量と思われる。

1.2. 正準変量の群平均

FIG. 1-2 は 4 群の正準変量の平均得点のプロットを示したものである。

<小嶋のデータ>

TABLE 1-2 の群平均をみると, 第 1 変量については, 息子→父, 娘→父, 息子→母, 娘→母の順で平均値が高くなっていき, 母親の方が父親に比べ, 子どもに対する愛情は強く, 子どもを自分のものとして所有

TABLE 1-1 正準変量と元の変量との相関

	小嶋のデータ		小高のデータ	
	CAN1	CAN2	CAN1	CAN2
1 AC	.403	.145	.435	.320
2 CH	.528	.109	.277	.241
3 PO	.466	.177	.016	.341
4 RE	-.073	.472	-.263	.446
5 CO	.443	-.025	-.028	.523
6 EN	-.005	.355	-.335	.569
7 PI	.288	.126	.115	.298
8 IN	.601	.417	.308	.701
9 CG	.203	.223	-.273	.434
10 HC	.390	.169	-.088	.451
11 IC	-.086	.219	-.040	.103
12 NO	-.431	.340	-.193	.061
13 AI	.295	-.000	.344	-.016
14 LD	.077	.428	-.231	.250
15 IP	.133	.426	-.386	.515
16 HD	-.320	.239	-.565	.266
17 WR	.090	.414	-.210	.552
18 EA	-.210	.446	-.036	.019

小数点省略

しておきたい傾向が強いと思われる。また、第2正準変量をみると、娘→父、娘→母、息子→父、息子→母の順で高くなっていき、娘に比べて、息子の方が親は感情的な統制と放任的な側面を合わせもった養育態度が強いと認知している。

＜小高のデータ＞

TABLE 1-2 の群平均をみると、第1変量については、娘→母、娘→父、息子→母、息子→父の順で平均値が高く、娘に比べ、息子が評定する方が、群平均値は低い。すなわち、娘に対する方が息子よりも愛情が強いと推測される。特に、娘→母の組合わせで群平均が高く、母親の娘に対する愛情が一番強いと推測される。一方、息子→父の組合わせの群平均が最も低く、父親の息子に対する愛情が一番低いと推測される。また、第2正準変量をみると、娘→父、娘→母、息子→父、息子→母の順で平均値が高くなっていき、娘に比べて、息子の方が親の感情的統制は強いと認知している。特に娘→父の群平均は最も低く、父の娘に対する感情的統制は低いように思われる。一方、息子→母の群平均が一番高く、息子に対する母親の感情的統制は強いと予想される。

以上の小嶋のデータと小高のデータの正準判別分析の結果、それぞれから、得られた正準変量は、異なるようである。第1正準変量について考えると、両者とも愛情面に関わっていることは共通しているが、小嶋のデータの方は、尺度内項目の内容を詳細に検討すると自己愛的な要素が多く含まれており、「愛するが故に子どもを所有したい」という養育態度が大きく関与しているように思われる。一方、小高のデータの方は、自己愛的な要素を含まない愛情—拒否に関係する正準変量であり、父・母と息子・娘の組合わせによって愛情の注ぎ方が異なると推測される。群平均をみると、両者とも、娘に対する母親の愛情が最も高く、息子に対する父親の愛情が最も低くなっている。次に第2正準変量をみると、両者とも感情的統制の変量に関係しているが、小嶋のデータでは、感情的な統制の変量に加えて、甘いしつけ、自由放任の変量についても負荷しており、親は、子どもが男子か女子かによって、放任的な養育態度を使い分けていたように思われる。しかし、両者ともその順序は一致しており、特に、息子→母で最も群平均が高く、娘→父で群平均が低くなっている。

さて、FIG. 1-2 をみると、小嶋のデータにおいては、第1軸は、評定されるのが父親か母親で判別され、第2軸は評定するのが息子か娘かで判別されており、

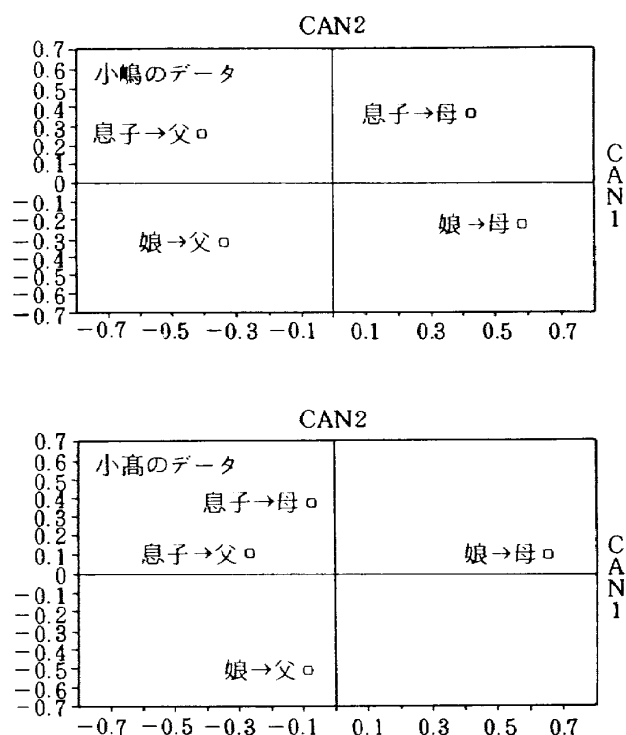


FIG. 1-2

TABLE 1-2 正準変量の群平均

	小嶋のデータ		小高のデータ	
	CAN1	CAN2	CAN1	CAN2
息子→父	-.498	.256	-.380	.081
息子→母	.316	.350	-.185	.401
娘→父	-.398	-.368	-.123	-.497
娘→母	.576	-.226	.643	.055

小数点省略

4つの群がそれぞれの象限に割当てられ、整然としていることが推測される。一方、小高のデータにおいては、その4群の構造は必ずしも小嶋氏の構造ほど明確ではない。詳細は考察に譲るが、特に父親の役割が不明確になっているように思われる。

【分析II】—平均値及び、分散の検定—

小嶋の資料と小高の資料の間で、群別ごとに18尺度値の平均値と標準偏差の時代比較を行う。

4群についての標準偏差と平均値の比較

小嶋のデータと小高のデータの同一尺度ごとに標準偏差と平均値の比較を群ごとに行った。TABLE 2-1 は、群別の平均値と標準偏差の結果である。また、FIG.

2-1-1, Fig. 2-1-2 は群別に標準偏差, 平均値をグラフに示したものである。比較を行いやすくするために8項目からなる尺度の値はそのままにして, 16項目を含む尺度については図の上では1/2を乗じることににより比較を行った。比較を容易にするために尺度の配列は辻岡・小高 (1992), 小高 (1992) の因子分析の研究に基づいた因子別 (情緒的支持, 感情的統制, 同一化, 放任) の配列にした。

(1) 息子→父の組合わせ

F検定の結果, 5%水準で有意であった尺度はAC

(受容), PI (積極的関与), AI (個性化の受容), CH (子ども中心主義), WR (関係の撤回) であり, WR (関係の撤回) の尺度以外は小高のデータについての標準偏差よりも小嶋のデータの方が大きい値を示している。これらの尺度の多くは情緒的支持に関する尺度であり, 父親の息子に対する情緒的な養育態度は25年前の養育態度の方がより多様化していたと推測される。また, 平均値において, 小嶋のデータと小高のデータとの間で5%水準で有意な差 ($P<.05$) がみられた尺度はPI (積極的関与), HD (非好意的離反), IC (一貫しないしつけ), RE (拒

TABLE 2-1 小嶋のデータと小高のデータの平均値と標準偏差の比較

	息子→父		息子→母		娘→父		娘→母	
	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.
1 AC	31.700 31.770	6.823 5.243**	33.260 32.681	6.628 5.618	30.843 31.122	6.761 6.830	33.902 34.301	6.763 7.267
2 CH	15.573 15.761	3.582 2.854*	16.940 15.805**	3.353 3.181	15.458 15.260	3.436 3.347	17.229 16.455	3.501 3.481
3 PO	13.040 14.460**	2.944 2.493	14.093 14.814	2.992 2.947	12.869 14.000**	2.636 2.534	14.118 14.504	2.674 2.926
4 RE	24.127 27.124**	5.069 5.524	24.153 27.947**	5.028 5.811	22.784 25.463**	4.452 5.958**	22.719 25.642**	4.811 6.631**
5 CO	13.900 14.832*	3.220 2.797	14.680 15.257	3.014 2.821	13.882 13.927	2.966 2.869	15.235 14.699	2.700 3.213*
6 EN	12.360 13.513**	3.211 3.487	12.273 14.257**	2.840 3.557**	11.588 12.407*	2.961 3.295	11.856 12.488	2.560 3.343**
7 PI	27.313 30.115**	5.724 4.515**	28.673 31.000**	5.573 4.819	27.111 29.553**	5.648 6.077	28.588 30.797**	5.549 6.477
8 IN	11.947 13.088*	3.481 3.750	13.533 14.504*	3.596 3.607	11.176 12.179*	2.895 3.485*	13.320 14.309*	3.412 4.057*
9 CG	12.213 14.097**	3.147 3.313	12.733 14.018**	3.193 3.389	11.850 12.748*	2.784 3.182	12.510 13.000	3.193 3.761
10 HC	25.760 28.504**	5.210 5.993	27.080 29.204**	4.859 6.002*	25.216 26.837*	5.163 5.562	27.294 27.911	4.887 6.392**
11 IC	13.087 13.867*	3.015 3.293	12.847 14.619**	2.925 3.235	12.575 14.171**	2.976 3.426	12.523 14.008**	3.034 3.465
12 NO	14.473 13.965	2.943 3.151	13.593 14.372*	2.859 3.366	13.732 14.073	2.856 2.931	12.765 13.569*	2.892 3.131
13 AI	33.347 33.257	5.870 4.811*	34.593 33.699	5.405 5.069	33.458 33.878	6.178 6.535	35.065 35.260	6.148 6.828
14 LD	12.987 14.088**	2.894 2.748	13.493 14.628**	3.044 2.775	12.497 13.894**	2.554 2.773	12.660 13.634**	2.637 2.844
15 IP	13.293 14.637**	3.428 3.474	13.520 14.717**	3.336 3.615	12.275 13.130*	3.058 3.084	13.052 13.195	3.418 3.597
16 HD	26.173 28.823**	5.050 5.044	24.873 28.673**	4.798 4.947	25.118 27.252**	4.990 5.732	24.020 25.821**	5.119 5.517
17 WR	11.000 13.425**	3.068 3.919**	11.173 13.770**	3.130 3.739*	10.176 11.919**	2.492 3.484**	10.686 12.553**	2.945 4.126**
18 EA	14.820 14.912	2.993 3.169	14.500 14.876	3.340 3.595	13.941 14.821*	3.179 3.175	13.490 14.780**	3.266 3.569

* $p<.05$ ** $p<.01$

注: 上段は小嶋のデータの平均値と標準偏差, 下段は小高のデータの平均値と標準偏差である。

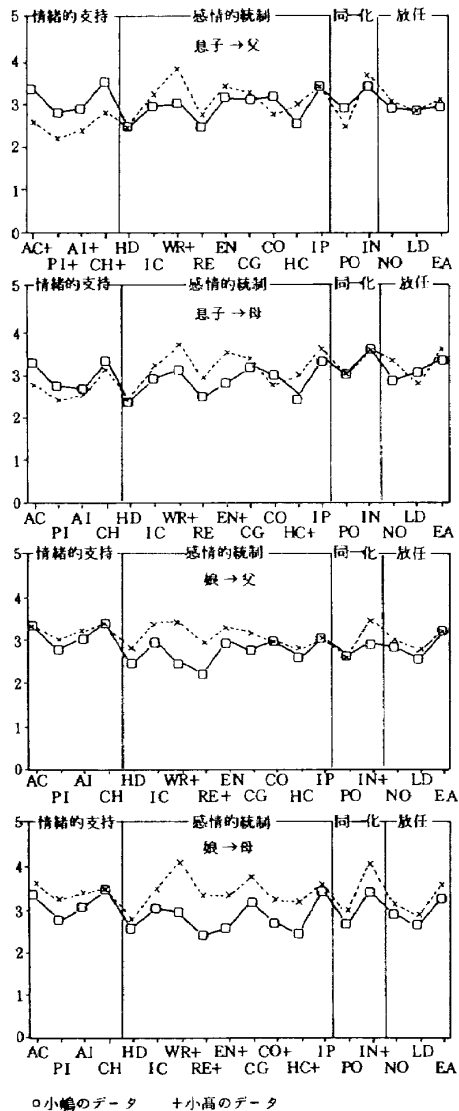


FIG. 2-1-1 標準偏差の比較

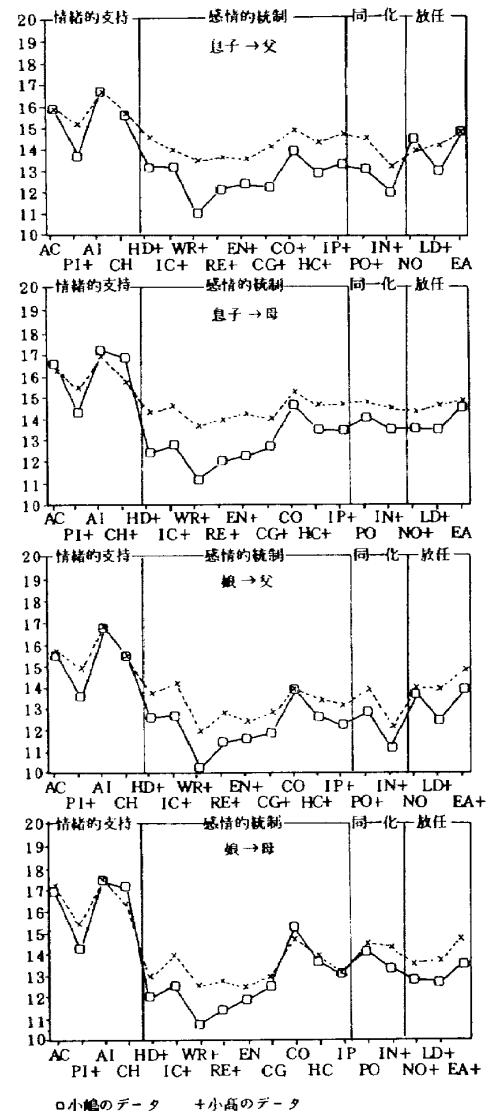


FIG. 2-1-2 平均値の比較

否), WR (関係の撤回), EN (強制), CG (罪悪感による統制), CO (統制), HC (敵対的統制), IP (不安感情の押し付け), PO (所有欲), IN (干渉), LD (甘いしつけ)であった。これをみると、どの尺度をみても、小嶋の得点より高い値を示しており、現在の息子は、25年前の息子に比べ、父親からの心理的な統制が強いと感じており、また、同一化傾向も強いと感じている。

(2) 息子→母の組み合わせ

F検定の結果、5%水準で有意であった尺度は、WR (関係の撤回), EN (強制), HC (敵対的統制)であり、小高のデータについての標準偏差の方が小嶋のデータよりも大きい値を示している。これらの尺度は感情的統制に関する尺度であり、現在の母親の息子に対する統制的な養育態度は25年前の養育態度に比べ、より多様化しており、家庭によって養育態度が異なると思われ

る。また、平均値について検討すると、小嶋のデータと小高のデータとの間で5%水準で有意な差 ($P<0.05$) がみられた尺度はPI (積極的関与), CH (子ども中心主義), HD (非好意的離反), IC (一貫しないしつけ), WR (関係の撤回), RE (拒否), EN (強制), CG (罪悪感による統制), HC (敵対的統制), IP (永続的不安感情の押し付け), IN (干渉), NO (非強制), LD (甘いしつけ)であった。CH (子ども中心主義)以外は、小高のデータの方が高い値を示しており、過去に比べ、現在の息子の方が、母親からの感情的な統制は強いと感じている。一方、CH (子ども中心主義)については、25年前の方が高い値を示しており、現在の息子は、母親は子どもを中心にした養育態度をおこなっていないと認知している。

(3) 娘→父の組み合わせ

F検定の結果、5%水準で有意であった尺度は、WR

(関係の撤回), RE(拒否), IN(干渉)であり, 小高のデータについての標準偏差の方が小嶋のデータよりも大きい値を示している。これらの尺度は感情的統制に関する尺度, 及び, 同一化に関する尺度であり, 現在の父親の娘に対する統制的な養育態度は25年前の養育態度に比べ, より多様化しており, 家庭によって養育態度が異なると推測される。また, 平均値についてみると, 小嶋のデータと小高のデータとの間で5%水準で有意な差 ($P<.05$) がみられた尺度は, PI(積極的関与), HD(非好意的離反), IC(一貫しないしつけ), WR(関係の撤回), RE(拒否), EN(強制), CG(罪悪感による統制), HC(敵対的統制), IP(永続的感情の押し付け), PO(所有欲), IN(干渉), LD(甘いしつけ), EA(自由放任)であった。これを見ると, どの尺度をみても, 小嶋の得点より高い値を示している。すなわち, 現在の娘は, 25年前の娘に比べ, 父親から感情的な統制が強いと感じており, また, 一方, しつけも甘く, 放任的であると認知している。

(4)娘→母の組み合わせ

F検定の結果, 5%水準で有意であった尺度は, WR(関係の撤回), RE(拒否), EN(強制), CO(統制), HC(敵対的統制), IN(干渉)であり, 小高のデータについての標準偏差の方が小嶋のデータよりも大きい値を示している。これらの尺度は感情的統制に関する尺度, 及び, 同一化に関する尺度であり, 現在の母親の娘に対する統制的な養育態度は25年前の養育態度に比べ, より多様化しており, 家庭によって養育態度が異なると推測される。そして, 平均値について検討すると, 小嶋のデータと小高のデータとの間で5%水準で有意な差 ($P<.05$) がみられた尺度は PI(積極的関与), HD(非好意的離反), IC(一貫しないしつけ), WR(関係の撤回), RE(拒否), IN(干渉), NO(非強制), LD(甘いしつけ), EA(自由放任)であった。これを見ると, 多くの尺度が, 現在の得点の方が小嶋のデータの得点より高い値を示している。すなわち, 現在の娘は, 25年前の娘に比べ, 母親の感情的統制は強いと感じており, また, 放任的であるとも感じている。

考 察

【分析1】の結果, 小嶋のデータからも小高のデータからも有意な2つの判別軸が抽出されたが, 小嶋のデータにおいては, PO(所有欲), IN(干渉)の自己愛的要素を多く含んだ愛情—拒否の軸が得られたのに対して, 小高のデータにおいては, 自己愛的な要素の薄い愛情—拒否の軸が得られた。すなわち, 25年前は父親か母親かによって, また, 子どもが息子か娘かによっ

て自己愛的な愛情を使い分けていたようであるが, 現在は子どもに対する自己愛的な養育態度は, 息子→父, 息子→母, 娘→父, 娘→母において一様になっていると推測される。さて, 群平均のプロット図をみると, その配置は類似しており, 両者とも群平均の平均値の座標は息子→父から出発して, 第2象限から右回りに息子→母, 娘→母, 娘→父と移動していることがわかる。このことから, 過去も現在も息子に対する, また, 娘に対する父親の役割, 母親の役割は全体のパターンとしては類似していると思われる。しかし, 詳細にみると, 異なっている。結果のところでも述べたように小嶋のデータにおいては, それぞれの象限によって4つの群が分割されているのに対し, 小高のデータでは明確に分割されていない。すなわち, 過去においては息子に対する, また, 娘に対する父親の役割, 母親の役割というものが明確であったのに対し, 現在ではそれが不明瞭になっていると推測される。さらに, 群平均の差の最も大きい組み合わせをみると, 第1軸では息子→父と娘→母であり, また, 第2軸をみると, 息子→母, 娘→父でその差は大きく, 異性間の親子間の組み合わせで群平均の差は大きい結果となっていた。ところで, 深谷(1990)は, 父親を形容する形容詞を用いた父親像の因子分析的研究を例に挙げ, 現代の父親の目を通した昔の父親は「リーダー性」を備えていたのに対し, 現在の父親にはそれが欠け, 「母親的あたたかさ」を備える傾向があるということを見いだしている。また, 最近の高校生の中にある父親像は「リーダー性」「母親的暖かさ」の2つを備えており, 両性具有的な父親像が高校生の中にあると述べている。そして, 彼女は1979年に行われた国際比較調査の結果から, 日本の母親が父親と同様, 両性具有的な母親であり, 現在の家族の役割分担は昔ほど明確でないことを考察し, 父親像と母親像とが相互に接近していると考えている。本研究においても, これと類似した結果が現れていた。これは, 昔に比べ, 現在は封建主義的家族観念が希薄になっているのが1つの原因かもしれない。

【分析2】においては小嶋のデータの平均値と標準偏差の結果と小高のデータのそれとがTABLE 2—1に示したように, 比較されたが, 多くの尺度において有意差が認められた。特に, 積極的関与の尺度, 干渉の尺度, 一貫しないしつけの尺度をみると, 全ての組み合わせについて25年前よりも有意に高く, 現在の親は子どもに大いに関与していると推測される。このことは, 子どもの数が減少したことも原因の1つとして考えられる。すなわち, 一家庭の子どもの数が少ないために

一人の子どもに注意が集中してしまい、親は子どもにより多く干渉しがちになり、感情的になり、一貫性のないものになるということである。また、標準偏差をみると、ほとんどの場合、現在のデータの標準偏差の方が25年前の標準偏差よりも大きい値を示しており、家庭によって、親の子どもに対するしつけは異なると予想される。しかしながら、息子→父の組み合わせにおける情緒的支持に関する尺度群の標準偏差は25年前の方が有意に大きく、父親の息子に対する愛情的態度においては、ばらつきが小さくなっている。ところで、三宅(1990)は、核家族少子化時代ということに焦点を当て、子どもの数が少なくなったために母親との相互交渉が過剰となり、しかも、家事労働の負担が軽いために、子どもにかまいすぎたり、保護しすぎたりということになりがちであると述べている。昌子(1985)もまた、親の子どもへの過剰干渉になりやすい要因をいくつか挙げているが、その要因に、「家庭の生活の合理化」と「子どもの数の減少」を挙げている。つまり、家庭生活が合理化し、自由になる時間が増える一方で、子どもが少ないために干渉せざるをえなくなるというのである。さらに、三宅は、数少ない子どもであるために、親は子どもにすぐれた人間になって欲しいと願いがちであると述べているが、このことは年々激しくなる受験戦争に現れているように思われる。そこには親の大きすぎる期待が存在するように考えられる。子どもの数の減少はこれからも続くと言われるが、健全な親子関係を築くためには家族システム、教育システムを見直す必要があると思われる。

引用文献

- Anderson, J.P. 1940 A study of the relationships between certain aspect of parental behavior and attitudes and the behavior of junior high school pupils. *Teachers College Contribution to Education*, No. 809.
(Goldin, P.C. 1969 A review of children's reports of parent behaviors. *Psychological Bulletin*, 71(3), 222—236.から引用)
- 馬場謙一 1984 父とは何か 一精神分析からみた父親 馬場謙一・福島 章・小川捷之・山中康裕(編) 父親の深層 有斐閣, Pp 1—32.
- Du Valle, E.W. 1937 Child-parent social distance. *Sociology Society Research*, 21, 458—463.
(Goldin, P.C. 1969 A review of children's reports of parent behaviors. *Psychological Bulletin*, 71(3), 222—236.から引用)
- Droppleman, L.F., & Schaefer, E.S. 1963 Boy's and girl's reports of maternal and parental behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 648—654.
- 深谷和子 1990 子どもの中の父親像・母親像—二人親の時代へ— 児童心理, 44, 1476—1481.
- 後藤昌司 1975 多変量データの解析法 科学情報社
- Harris, D.B., & Tseng, S.C. 1957 Children's attitudes toward peers and parents as revealed by sentence completions. *Child Development*, 28, 401—411.
- 速水 洋 1984 父親の機能 一父親権威の衰退とその帰結— 馬場謙一・福島 章・小川捷之・山中康裕(編) 父親の深層, 有斐閣, Pp 143—166.
- 小嶋秀夫 1969 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要(人文科学編), 18, 55—70.
- Kojima, H. 1975 Inter-battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior. *Japanese Psychological Research*, 17, 33—48.
- 小高 恵 1992 親子関係の相互認知 IV 一小嶋氏のデータと新データとの比較— 関西大学大学院『人間科学』, 37, 109—134.
- 昌子武司 1985 親子関係と情緒 教育出版
- 三宅和夫 1990 少子化時代の子どもの性格形成 児童心理, 44, 1452—1459.
- 小川捷之 1984 母とは何か 一精神分析からみた母親— 馬場謙一・福島 章・小川捷之・山中康裕(編) 母親の深層 有斐閣 Pp 1—49.
- Parsons, T. & Bales, R.F. (橋爪貞雄他訳) 1970 核家族と子どもの社会化 上・下 黎明書房
(Parsons, T. & Bales, R.F. 1955 *Family : Socialization and Interaction Process* : Free Press.)
- 高橋恵子 1968 依存性の発達の研究：I 大学生女子の依存性 教育心理学研究, 16, 7—16.
- 辻岡美延・小高 恵 1992 親子関係の相互認知 III 一新データによる項目分析— 関西大学社会学部紀要, 23(2), 129—151.
- 鷲尾泰俊・大橋靖雄 1989 多次元データの解析 岩波書店
(1992.12.16受稿, 1993.2.22受理)